

42. 感染性心内膜炎と歯科口腔外科との関わり

獨協医科大学¹⁾ 口腔外科学

²⁾ 内科学 (心臓・血管)³⁾ 臨床検査センター

⁴⁾ 感染制御・臨床検査医学

大久保真希¹⁾, 博多研文¹⁾, 増山裕信¹⁾,
越路千佳子¹⁾, 泉さや香¹⁾, 和久井崇大¹⁾,
土肥 豊¹⁾, 麻野和宏¹⁾, 川又 均¹⁾,
伊波 秀²⁾, 豊田 茂²⁾, 井上晃男²⁾,
浅田道治³⁾, 及川信次³⁾, 吉田 敦⁴⁾,
菱沼 昭⁴⁾, 今井 裕¹⁾

【目的】感染性心内膜炎 (Infective Endocarditis : IE) は、心臓内膜に細菌集簇を含む疣腫を形成する全身性敗血症性疾患である。その治療、予防に関してはAHA, JCSの両ガイドラインで論じられているが、歯科口腔外科領域から検証した報告は少ない。

今回、われわれは、IE発症と口腔常在菌ならびに歯科口腔外科処置との関わりならびにIE発症予防における抗菌薬の適正使用について検討を行ったので、若干の考察を加え報告した。

【方法ならびに対象】検討1：2000年1月から2010年12月までに当院心臓・血管内科でIEと診断された患者47症例を対象とし、1) IE発症の誘因となった可能性のある処置、2) 血液培養で検出された細菌種とその抗菌薬感受性について検討した。検討2：2012年1月から3月までに当科の口腔ケア専門外来を受診したIE患者ならびにIE発症リスク患者27症例の口腔常在菌とその抗菌薬感受性について検討した。

【結果】検討1：1) 口腔感染巣の存在や抗菌薬予防投与をせず口腔内処置を施行するなど、IE発症に口腔内の何らかの因子が関わったと思われる症例が29例61%認められた。

2) IE発症患者の血液培養で同定された31症例に、Streptococcus, Staphylococcus, Enterococcus属などの口腔内常在菌が検出された。その薬剤感受性を検討すると、ABPC, PCGは約75%で感受性を認めたが、CLDM, FMOX, LVFXでは4～15%の耐性菌が認められた。検討2：検出された細菌種はStreptococcus, Neisseria, Micrococcus, Staphylococcus属であった。Streptococcus, Staphylococcus属に対して薬剤感受性試験を行ったところ、ABPC, PCGの感受性は92.3%であったが、FMOXは30.8%, LVFXは15.3%, CTM, EM, AZMでは半数に耐性菌がみられた。

【考察】口腔内の感染巣や観血的処置によりIEが惹起される可能性が示唆され、歯科口腔外科処置に関わるIE予防の更なる啓蒙が必要と考えられた。また、IE予防には、ガイドラインに基づいたペニシリン系抗菌薬の大量予防投与が有用であるが、口腔内常在菌に対する抗菌薬耐性化もみられており、適切な抗菌薬の使用が肝要と思われた。

43. 当科における腹腔鏡手術の導入経験

獨協医科大学泌尿器科学

幸 英夫, 西原大策, 布施美樹, 水野智弥,
増田聡雅, 神原常仁, 別納弘法, 阿部英行,
安土正裕, 深堀能立, 山西友典, 釜井隆男

【目的】当科では鏡視下小切開手術を主として行っていたが、本年1月より体腔鏡下手術も導入した。導入経験を報告する。

【対象】本年1月30日より10月3日までに体腔鏡下手術を行った34例。

【結果】男性23例, 女性11例。疾患は腎癌13例 (8例は単孔式, 2例は部分切除), 腎盂尿管癌8例, 副腎腫瘍6例 (4例は単孔式), 無機能腎2例。腎摘の1例で出血により解放手術へ移行した。根治的腎摘症例における出血量中央値：32.5 ml, 手術時間中央値：271分であった。

【考察】根治的腎摘における1例で解放手術への移行が見られたものの、おおむね出血量は少量であり、また臓器損傷や術後合併症も見られなかった。また、単孔式腹腔鏡手術においては従来法に比して、術後疼痛が軽度である可能性が示唆された。今後も症例を重ねることにより、より安全で、しかも低侵襲な腹腔鏡手術手技の確立に努めていきたい。